

# 豊潤の里 だより

## 栗本との会合 再開してみたが (上)

～ 木谷住民を馬鹿にするにも程がある ～

栗本ホールディングス (以下栗本 H) との話し合いを2年半ぶりの2月25日に木谷地域センターで再開した。新型コロナウイルス感染対策のため、栗本 H から広瀬営業部長、平野取締役統括事業部長、木谷自治協からは吉田会長、大田反対実行委員長、そして森重事務局の5名での会合となった。その内容は、①窓口シャットダウンの経緯、②栗本 H からの事業説明、③質疑で、以下①について一部を掲載したい。

① (自治協からの質問) 2018年9月木谷自治協が栗本 H との話し合いの窓口を閉じた経緯について、上司で取締役でもある統括事業部長がどう把握しているのか。

➡自治協が総会で処分場反対を決めたから (広瀬部長の回答)。

統括事業部長はもちろん広瀬部長も明確な説明が出来なかった。最後に出たのがこの言葉。全くながっかりさせられた!! 物事の状況を把握していない、住民の思いを理解しようとしないう栗本 H の実態が明らかになった。ましてや栗本 H の社内においても正しく報告されていないことが明白。住民の思いを全く無視し、利益追求の思いだけで進めていることにも腹立たしく思う。

事の経緯を整理すると次のようになる。2018年9月に広瀬部長より、次のような申し出があった。

「私 (広瀬) の勉強不足のため、多くの誤解を生じさせてしまった。また説明の場を設けてほしい」 (2018.9.19)。※この発言があったことすら全く忘れていた。

その時、以下のように厳しく指摘した。今回その意図を再度説明したら、「取り違えていた」「処分場建設について短時間では説明できない」 (広瀬部長) との返答。落胆の一言に尽きる。

- ▲地権者・住民代表を集めて説明してきたが、この期に及んで「勉強不足」「再度説明の場」と言われる意図が全く理解できない。
- ▲通常企業間での契約や交渉等の場で、自らの勉強不足を理由に再度交渉の場を持つことが通るのか。即交渉決裂ではないのか。木谷住民を軽視・愚弄するものである。
- ▲そんな誠意のない不謹慎な姿勢で、処分場事業を進めていこうとする企業神経が分からない。
- ▲住民の思いが「報告」「受容」されない企業体質。

当初から栗本 H による地権者・地域への説明は一転二転し、混迷を極めていた。重要な事前協議書も間違っ提示。そして今回の会合。

会合後、栗本 H は地権者に「自治協との会合は良い雰囲気だった」と触れ回っている。最初から議論が噛み合わず喧々諤々、「良い雰囲気」の訳がない。二枚舌? こうやって誤魔化しながら事業を進めようとしているやり方にだまされないようにしたい。

# 地域共生社会づくりをめざして

## －「向こう三軒両隣プラス1」の木谷地域へ

木谷自治協議会 会長 吉田清志

桜の花の季節を迎えました。桜開花（3月11日）、広島が全国で1番目でした。何か良い事がありそうな気がして、にっこりしています。新型コロナウイルス禍の下、役員・区長・地域の皆様には、感染予防・拡大防止のもと自治協議会の幹事会や行事にご協力いただきました。心より感謝いたします。

3月6日、『やっぱり安芸津はええところじゃね!!』～支え合い つながりづくり～をテーマに「あったか笑顔のまちづくり講演会」が開かれました。①見守りを兼ねてお弁当を届ける「キッチン花」の活動、②地域の居場所づくりをめざす「子ども食堂ハーモニー」の活動、③安芸津だヨ！全員集合！～甲斐農園×協力隊～農業から始まるまちづくり～活動、をテーマとして3つの活動報告がされました。三津・風早・木谷の3地域とまちづくり協力隊員の発表でした。

どの活動も意欲あるリーダー、支える仲間・自治協をはじめ各種団体、利用される地域の人の存在が活動継続への大きな力となっていました。また3つの活動は、地域住民のささやかな支え合い、ゆるやかなつながりである「向こう三軒両隣」の関係に支えられて進化・拡大していくのだと確信しました。

コロナ禍の下、感染予防に留意しながら、自治協幹事会・産廃処理施設反対実行委員会等を定期的に確実に実施して、木谷地域の課題解決に向けて微力ですが努力した2年間でした。東広島市議会をはじめ沢山の会議で地域共生社会づくりの知恵を学びました。

『地域歴史の価値に比べれば目の前の利益・繁栄の価値は遥かに小さい』。目の前の利益や繁栄を追い続けてきた私たち、新型コロナウイルスの前では本当に無力であることを痛感させられました。また「瀬戸内海国立公園にある美しく豊かな海、地域の馬鈴薯・牡蠣・柑橘等を未来へ残すのだという思い」「木谷地域の発展継続を我が事として取り組む」「個人でなく多くの人との共存こそ大切にする時だと思わぬわけにはいられない」等多くのことを学びました。

住民一人ひとりが隣のことを気遣い、自分できることでゆるやかにかかわり、ささやかに支え、支えられて生活していく。「百二歳の女性の弁『自分のことは自分です』『使える機能は何歳になろうと使って生活する』『今でも家族の食事を作っている』『できないことは人に頼む』」

今期をもって自治協会長としての任期を終えることとなりました。これまでのご支援・ご協力に心より感謝いたします。今後も自治協の一員として「向こう三軒両隣」を進めつつ、新しく「プラス1」を提案し推進していきたいと思っています。

# コロナ禍中の自主防災訓練



2月21日、災害はいつ発生するかわからないと、新型コロナウイルスの感染予防に配慮しながら自主防災訓練が行われました。地震とそれに伴う津波の発生を想定した避難訓練では、209名がそれぞれの地区の指定された避難場所に集合しました。また小学生は消防団員とともに近くの高台に避難し、そのあと消防団の放水訓練を見学しました。

## (コラム) 歴史から知恵を学ぶ 第3話

### 地域発展の礎：呉線開通

元木谷自治協議会会長 植野洋文(西之谷在住)

三呉線(さんごせん)は、三原駅を起点にして昭和5年(1930)から下り線駅の開業を順次進め、呉駅までの全線が開通したのは昭和10年(1935)のことである。これを機に明治36年(1903)から開業していた海田市駅⇄呉駅の鉄道(明治42年、呉線と命名)と統合し呉線と改称した。したがって呉線とは、三原駅から安芸郡海田町の海田市駅に至る西日本旅客鉄道(JR西日本)の鉄道線路のことである。歴史的には、山陽本線のバイパスとして機能してきた。海田市駅は、全列車乗り入れの拠点としての役割を果たしている。

○昭和25年(1950)・・・東京～広島間呉線経由、急行「安芸」運行開始

○昭和32年(1957)・・・呉線ディーゼル化実施

○昭和45年(1970)・・・呉線電化開通

○昭和53年(1978)・・・急行「安芸」廃止

右の写真は昭和8年(1933)、重松神社前で三呉線の線路敷設工事(ガード設置)がされている場面である。遠くに中国煉瓦工場(茅葺屋根の倉庫等)が見える。



一口メモ：昭和7年(1932)木谷の郷・防地地区では、「三呉線防地隧道(トンネル)と飲用水の件について」の陳情書が当時の国鉄に提出されています。内容は工事の進行に伴い、井戸が減水・混濁・枯渇して困っているため、早急に救済措置をとってほしいというものでした。国鉄当局は急いで妙専寺近くの田尾さん宅の線路脇に井戸を掘削し、要求に応えました。今でも電動ポンプを設置して利用されており、水栓をひねると勢いよく水が出ます。

## 木谷地域センター主催講座



3/8・15・16 体験講座「やってみよう！竹細工」開催（講師：水野哲朗さん）

竹ひごを編んでミカンやお菓子などを入れる「四ツ目かご」づくりの体験講座に6人が参加しました。慣れない作業でしたが、編み方を教わりながら一生懸命作りました。この講座で竹細工への興味を深めた方もおられました。

## 部会活動紹介

### 福祉生活部会



3/20 《友愛訪問》 春分の日、お菓子を持って伺いました

昨年は新型コロナウイルスの影響で中止となった友愛訪問。今年は77歳以上の292名のお宅に、区長の皆さんが見守りを兼ねお菓子を持って伺いました。 <自治協・木谷地区社協 蛟龍・区長>

木谷の人口（住民基本台帳）	世帯数	人口（男女計）	男	女
令和3年2月末現在	701	1542	753	789
令和2年2月末との比較	+7	-9	-2	-7

編集：木谷自治協議会事務局 広報担当